

水を飲む、命をつなぐ

浦和明の星女子中学校 二年 北神 咲季

水泳部が始まると、プールサイドには部活仲間の色とりどりの水筒が並ぶ。喉がからからになるまで泳いだ後、水筒をつかみ、中に入った水を勢いよく飲み干す。私はその時間が大好きだ。喉をつたって、水が体中を潤し、満たしてくれるのを感じられる。

私にとって、水は生命力の源である。部活動のときはもちろん、普段の生活でも、水を飲むと体が生き返るのだ。

そんな水好きの私が、初めて厳しい現実を目の当たりにしたのは、浄水場の見学に行った後、水について調べたときだった。

数年前、浄水場を見学に行き、その設備の大きさ、そして多さに驚愕した。話をうかがうと、川やダムから取った水を沈澱、ろ過など、様々な方法をういて浄化していくそうだ。また、ヒ素やカドミウムなどの有害物質が基準値を超えていないかを監視する役割も担っており、水の消毒もしているという。

さらに、ダムから水を取る「取水塔」、川から取る「取水せき」の写真も見せていただいた。その二枚の写真には、美しい森と川が写っていて、とてもきれいだっただけで今でも覚えている。それと同時に、森からダム、川、浄水場、それから水道……と、水はどこまでもつながっていくのだと分かり、そのスケールの大きさに圧倒された。

その後、水の神秘に魅せられた私は、ふとある一つの疑問が浮かんだ。世界に、安心して飲める水はどのくらい存在するのだろうか。気になり、調べてみたところ、使える水は予想よりはるかに少なかったのだ。

地球全体の水を直径一メートルの球とすると、人間が飲める水はビーチボールくらいであり、ましてや使いやすい水はゴルフボールより少し大き

いくらいだという。「水の惑星」と呼ばれるこの地球でも、人間の使える水はかなり少ないという現実。人間が飲める「ビーチボール」にも入らない「茶色い水」を飲まざるを得ない地域もあるというのだから水に関する問題は底が深く、容易に解決できるものではないと悟った。

そして、安全な水を確保するため、自ら行動を起こしたのが、去年なくなった中村哲さんである。

中村さんはアフガニスタンで活動をする医師でありながら、仲間と共に一六〇〇基程の井戸を掘ったうえ、用水路建設により、約一万六五〇〇ヘクタールもの土地を肥沃にしたという。当時の中村さんいわく、

「アフガニスタンの餓死の典型は、食べ物が無くて死ぬのではない。食べ物が入らず、飢えを紛らわすために不衛生な水を飲み、その結果感染症にかかる。そして脱水症状になり、亡くなっていく。」

調べてみると、アフガニスタンでは、死亡した子供のほとんどの死因が、感染症によって慢性化した下痢によるものだった。水の安全性や、飲めるか飲めないかに関わらず、水を飲まなければ生きていけない。日本から少し離れただけで、このようなことが起こっているのが現実だ。中村さんの「百の診療所より一本の用水路」という言葉に共感しつつ、私達にとって「水」とは何か、考えさせられた瞬間だった。

前に述べたとおり、水はどこまでもつながっていく、スケールの大きい存在である。そしてさらに、アフガニスタンの実態を知ってもう一つ分かったことは「水は命をつないでいくものである」ということだ。洪水や津波もあり、水との共生は難しい。しかし、水によって得られた命、そして平穏な日々がある。安全な水が飲めるというだけで、どれ程の命が救われるのか、想像に難くはないだろう。

水を飲めば、それが命の糧となって体中を潤してくれる。だから今日も、水を飲もうとキッチンの蛇口をひねる。水で満たされたコップの中に、生命の躍動を感じた。